

宇宙通信アドバイザーボード（第4回）議事要旨

日時：令和7年1月20日（月）13：00～14：45

場所：WEB 会議

出席者：梅比良座長、甘木構成員、石田構成員、加保構成員、小紫構成員

議題

- （1）開催要綱の改定について
- （2）宇宙戦略基金（令和5年度補正予算分・総務省計上分）の執行状況について
- （3）宇宙戦略基金実施方針（総務省計上分）（令和6年4月26日総務省・内閣府決定）の改定について
- （4）宇宙通信分野における研究開発課題等について

議事要旨

梅比良座長により、議題に沿って議事を進行。

議題（1）について、宇宙通信アドバイザーボード事務局（以下「事務局」という。）より構成員変更に関する説明が行われた。

議題（2）について、事務局より説明が行われ、その後、構成員より再公募を行うものについての支援機関及び金額に関する質問が行われた。

議題（3）について、事務局より説明が行われ、各構成員より、実施方針の修正経緯に関する質問や、1年目のステージゲート時の評価に応じた対応等に関する質問が行われたほか、技術開発後の社会実装に繋がられるよう公募時等に事業化の体制についてもきちんと見ていただきたい等の意見が述べられ、案のとおり改正することをアドバイザーボードの意見とすることとした。

議題（4）について、事務局より説明が行われ、その後、各構成員より今後の宇宙通信分野における研究開発課題について議論が行われた。議論の概要は次のとおり。

- 事務局から提示されたものは、全体を広くカバーしており、可能性がありそうなものをきちんとリストアップしていただけているのではないかと。
- 非宇宙プレーヤー等、宇宙との関わりが薄かった層が関心を持って参入出来る工夫があると良い。この点について、地上系通信にしか関心を持たなかったプレーヤーが非地上系通信に関心を広げるようにしていくとの事務局の方向性は理解。
- メーカーの支援だけではなく、オペレータやサービス提供者が宇宙戦略基金を活用して新たなサービスを行い、市場を獲得していくという流れを作ることも重要であるため、この点を踏まえて宇宙戦略基金の技術開発テーマの設定をしていただきたい。
- 個々の端末の開発や技術の開発ではなく、通信システムとして捉えて支援していくことが今後重要になってくるのではないかと。
- 昨今の業界の動きを踏まえ、静止軌道を中心としたテーマ設定だけではなく、中軌道や低軌道におけるイノベーションを日本として取り込んでいくためのテーマも取り込んでいただくと、バランスが良いのではないかと。
- 日本は光通信技術に強みがあり、光通信の技術開発自体を推進していくことはもちろん重要ではあるが、その事業化に関して明確なプランを持っている者は少ない。光通信の技術を使っていかに事業化していくのかもしっかりと審査していくことが重要。
- 日本単独で光通信端末を作り世界を取っていくということは非常に大変だと思っている。海外のメーカーと協力し、その一部のコンポーネントを提供することで市場展開していこうという例もあるところ、そういった海外メーカーを活用して市場展開していくという考え方も必要ではないかと。
- デジタル通信ペイロードについては、海外のメーカーがかなり進んでおり、既に大きな差がついているという印象。そうした状況の中で、将来の国際競争力確保のために一体何をやっていくのかということを見ていくことが必要。
- ペイロードについては、メインストリームはデジタル化であるが、こうした需要は、もともとサービス条件等の変化に対応するための柔軟性の確保の観点から生じているところ、必ずしもデジタル化のみが解ではないのではないかと。海外の方が進んでいる中で日本の競争力確保のために何をやるべきかということであり、デジタル化以外の選択肢を排除しない形にすべきではないかと。

- 月面探査・開発については、100%国産ということにこだわることなく、海外のプレーヤーも活用してシステムとしてしっかりと取りに行くという発想が重要ではないか。
- 衛星測位サービスは重要性が増してきているので、宇宙戦略基金の中で今後どのように扱っていくのかは整理が必要ではないか。
- 国際連携の観点から、技術要素として日本が練度を高める必要がある技術は何かという観点も重要。この時点で何か答えを出す必要はないが、日本として自律的に持つべきところと国際的に連携すべきところをどう線引きしていくかという論点がある。
- 人材育成という観点から、大学を巻き込んで開発し人を長期的に育てるというテーマが設定も重要ではないか。文部科学省と連携し、何らかの募集をする際に、通信の観点からも応募できるといったことを示すような動きがあれば、大学も動きやすくなるのではないか。

以上